



TITLE:

京大広報 No. 152

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 152. 京大広報 1978, 152: 726-729

ISSUE DATE:

1978-02-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/209538>

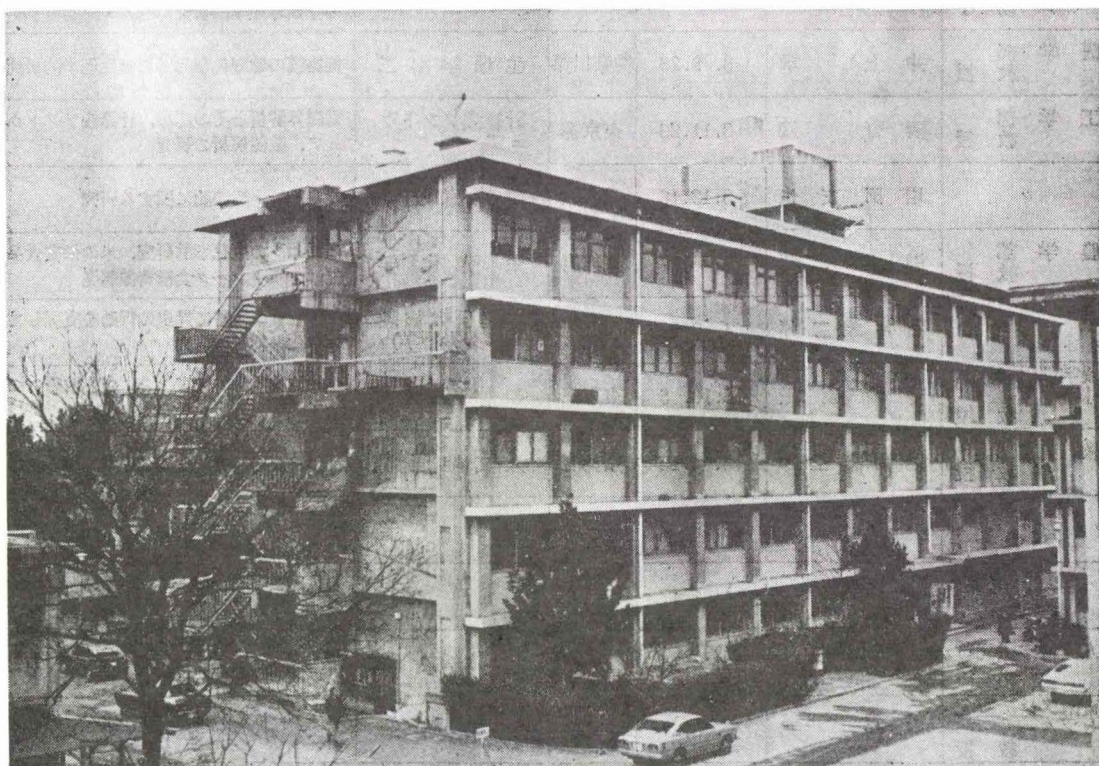
RIGHT:

ファイル中には未許諾による非表示部あり.

京大広報

No. 152

京都大学広報委員会



ウイルス研究所全景（医学部附属病院西部構内—関連記事3ページ〈紹介〉—）

目 次

昭和52年度の停年退職教官……………	2	霊長類研究所長の交替……………	3
1月10日から11日にかけての事態について……………	2	〈紹介〉	
1月15日の捜査について……………	2	ウイルス研究所……………	3
フランス政府からの受章……………	3	〈随想〉 二つのセンター	
文学部長の交替……………	3	名誉教授 横尾義貫……………	4

＜大学の動き＞

昭和52年度の停年退職教官

京都大学教員停年規程により、本年4月1日付けで本学を退職される教官は、次の方々（教授15名、助手1名）である。

部 局・職	氏 名	生年月日	出身地	講座・研究部門	研 究 分 野
文 学 部 教 授	佐 藤 長	大正 3. 9.16	宮城県	東洋史学第一	東洋史学、特に北方民族史・チベット史の研究
〃	池 田 義 祐	4. 3.28	福井県	社 会 学	理論社会学、特に支配理論の研究と農村社会学の実証的研究
法 学 部 教 授	磯 村 哲	3.12. 9	広島県	法 社 会 学	民法および法社会学
理 学 部 教 授	加 藤 勝	4. 1.23	北海道	植物生態研究施設（特殊環境生物学）	物理・化学的環境による動物の生活環境制御に関する研究
〃 助 手	廣 江 美 之 助	3. 6. 7	京都府	植 物 分 類 学	植物系統分類学、特に世界産セリ科植物の分類地理学的研究
医 学 部 教 授	井 上 章	3. 9.25	神奈川県	生 理 学 第 二	細胞膜の物理化学的・電気生理学的研究
工 学 部 教 授	清 野 武	3.11.26	東京都	計算機ソフトウェア	電磁界解析とその応用、計算機ソフトウェア、数値解析の研究
〃	増 田 友 也	3.12.16	兵庫県	建 築 意 匠 学	建築設計・建築論に関する研究
農 学 部 教 授	満 田 久 輝	3. 5.27	京都府	栄 養 化 学	ビタミンの生化学的研究、米の栄養食品工学、新タンパク食糧資源開発
〃	石 井 象 二 郎	4. 2.12	東京都	農薬研究施設（農薬影響学）	昆虫生理学、特に昆虫の行動を支配している化学物質の研究
農学部附属演習 林 教 授	寺 崎 康 正	3.10. 5	東京都	森 林 経 理 学	森林施業論、特に森林の生長と収穫についての研究
教 養 部 教 授	藤 岡 謙 二 郎	3. 4.15	京都府	人 文 地 理 学	都市と交通路に関する歴史地理学的研究
〃	小 笹 英 夫	3. 5.21	京都府	化 学	有機合成、特に反応機構の研究
〃	大 浦 幸 男	4. 1.17	京都府	英 語	現代詩を中心とした英米文学の研究および英語教授法の実践的研究
人文科学研究所 教 授	林 星 辰 三 郎	3. 4.14	石川県	日 本 文 化	日本文化史、特に古代より近世にいたる変革期の歴史と文化の総合的研究
東南アジア研究 センター 教 授	本 岡 武	4. 2.27	兵庫県	生 物 構 造	東南アジアにおける農業開発の経済学的研究

1月10日から11日にかけての 事態について

さる1月10日（火）午後10時頃、大学本部時計塔内部から、時折り明りが洩れ、器物を破壊するような大きな物音が聞こえるなど、異常を感じさせる事態が起った。この知らせを受けた総長は、この事態に緊急に対処し更に不測の事態に発展することを防止するため、同11時警察の出動を要請した。

翌11日（水）午前0時20分頃、警官隊が本部構内に立ち入り、その際6名が逮捕され、引き続き現場における捜査が行なわれた。警官隊は、5時

40分頃学外へ引き上げた。

なお、この間に、時計塔正面外壁に「竹本処分粉碎」の6文字が落書された。

1月15日の捜査について

さる1月15日（日）、警察による学内および熊野寮の捜査が行なわれた。

この日の捜査は、昨年12月5日（月）教養部正門前で起った事件に係る暴力行為、兇器準備集合、傷害および1月10日（火）から11日（水）にかけて本部時計塔とその周辺で起った事件に係る建造物侵入、同損壊、暴力行為に関する各被疑事件について突然行なわれたもので、関係各部局長

等が立会人となり、午前8時30分頃から始まり、11時40分頃までに終了した。

捜索は、12月5日の事件に係るものとして文学部学友会ボックス・工作室、教育学部自治会ボックス・学生控室、経済学部学部長室・同好会ボックス、理学部学生控室（無所属）、工学部学部長室・応接室・事務部長室、農学部自治会ボックス、教養部尚賢館、西部構内同学会ボックスの各場所について行なわれた。また、1月10日から11

日の事件に係るものとして西部構内山岳部ボックスおよび熊野寮の一案について行なわれ、あわせて本部建物およびその附近の現場検証がなされた。以上の捜査において、ヘルメット、角材、竹竿、鉄パイプ、軍手、ビラ等が押収された。

なお、この日の捜査のうち、熊野寮の捜索等に関して従来の慣行にもとる点があったので、学生部長は警察にこの旨を強く申し入れた。

＜部局の動き＞

フランス政府からの受章

本学文学部大地原 豊教授と人文科学研究所川勝義雄教授に対して、フランス政府から教育功労章 (l'Ordre des palmés Académiques) シュバリエ級が授与され、その授与式が1月19日、関西日仏学館で行なわれた。

この教育功労章は、教育や学術研究の面で、フランスとの文化交流に功績のあった外国人に授与される勲章である。（文学部 人文科学研究所）

＜紹介＞

ウイルス研究所

ウイルス研究所は昭和31年4月1日に創まる。当初、物理、病理、化学、血清免疫、予防治療の5部門でスタートしたが、その後順次、がんウイルス、附属ウイルス診断研究施設、遺伝学、細胞ウイルス学、神経ウイルス病（客員）の4部門、1施設が加わり、現在9部門1施設の構成になっている。

ウイルスは元来、人・動物・植物を問わずいずれも疾病の病原体としてその存在が認識されたものであるが、1950年代に入って、組織培養技術の進歩に伴い、病原性の不明なウイルスの存在も認められるようになった。

他方、ウイルスは、生物として最も単純な存在である。およそ実^{『』}というものは設定条件が簡単な程、結果と設定条件との因果関係をつけ易い。このような観点から、生物として最も単純なウイルスは、生物学の基礎的法則の研究に最も適していることになる。1940年代以降生物学の革命といわれる分子遺伝学、分子生物学を発展させるのにウイルスが大きく貢献したのは、こうした理由によるものである。

ウイルス研究所はこうしたウイルスを利用しての基礎生物学的研究が大きく発展しつつある時に創設されたわけで、病原論的な医学的立場からスタートしたのではあるが、その研究が医学的側面と基礎生物学の側面の両面をもつ方向に進んだことには必然性があったというべきであろう。そして既設の東京大学伝染病研究所（現在の医科学研

文学部長の交替

1月16日、今津 晃文学部長の任期満了に伴い、その後任として西田龍雄文学部教授（文学科言語学講座担当）が任命された。任期は、昭和54年1月15日までである。（文学部）

霊長類研究所長の交替

1月16日、近藤四郎霊長類研究所長の辞任に伴い、その後任として河合雅雄 霊長類研究所教授（生活史研究部門担当）が任命された。任期は、昭和55年1月15日までである。（霊長類研究所）

研究所）、大阪大学微生物病研究所が“医学的”であったから、類型化を避けてウイルス研究所が“基礎生物学的”に傾斜したことは賢明でもあり、妥当でもあったといえよう。

病理部門では、リンパ組織、リンパ球の免疫細胞学的研究。物理部門では、ウイルス感染細胞、マウス乳癌細胞、ウイルス粒子の形態および形態形成に関する電子顕微鏡的研究。化学部門では、RNA合成の制御機構およびDNA依存RNA合成酵素の構造と機能に関する分子遺伝学的並びに分子生物学的研究。血清免疫部門では、ウイルス感染に対する細胞性免疫の成立機構並びに作用機構、ウイルス発癌機構、ウイルスによる envelope fusion および細胞融合の機構、ウイルス感染初期過程の分析、フェージ変換遺伝子の由来等の研究。予防治療部門では、インフルエンザウイルス感染に対する防御機構、遅発ウイルス感染の免疫病理等の研究。がんウイルス部門では狂犬病ウイルスの増殖、持続感染、ウイルス感染細胞内封入体の生物学、DNA型腫瘍ウイルスによる腫瘍細胞化機構等の研究。遺伝学部門では、大腸菌におけるDNA依存RNA合成酵素の遺伝学、エピゾームDNAの複製調節、膜蛋白合成の遺伝的制御等の研究。細胞ウイルス学部門では、動物ウイルス感染に対する細胞の反応、インターフェロンの生化学および生物学、細胞の増殖と分化の制御等の研究。ウイルス診断研究施設では、年間15,000件に及ぶ患者材料の診断業務のほか、手足口病やビルマのウイルス病についての疫学、胎内感染、新生児感染、心臓疾患とウイルスの関係等の研究

